

概要

2021年9月～10月に、JSTおよび文部科学省から推薦（※1）された4名の若手研究者に「総合知」に関するヒアリングを行った。ヒアリングの内容は多岐にわたったが、主に次の観点から整理した。

1. 「他分野の知を総合的に活用して研究を進めることのできる研究者が、若手研究者の中には比較的多く存在する」という指摘がある。そのような若手研究者にインタビューを行い、要因を抽出し、総合知を戦略的に推進する方策を検討する上で参考にする。
2. 「総合知の活用を推進するにあたり、総合知的な研究を実施する研究者を適切に評価することが非常に重要だ」という指摘がある。①所属組織における評価、②研究プロジェクトにおける評価、に関して現状の問題点を抽出し、総合知を戦略的に推進する方策を検討する上で参考にする。

※1 研究者の推薦にあたっては、以下の条件を提示した。

- ・従来の研究分野の枠にとらわれず、他分野の知を幅広く総合的に活用して研究を進めている研究者。
- ・若手、中堅研究者。おおよそ40歳以下。
- ・性別、所属、専攻などのバイアスはかけない。

総合知的な発想の獲得

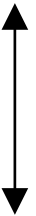
- 30代、40代の若手は、総合知の考えを普通に受けいれている。
- COEの経験やリーディングプログラム、アクティブラーニング等の教育現場への効果ではないか。
- 助教時代の研究経験で「人間」を見るようになった。法律、社会制度に興味を持った。
- ELSIの専門家やURAとの出会いで、ELSIや学際研究がより身近なものになった。
- サイエンスコミュニケーションに取り組んだ際、如何に関係者と一緒になって課題を考え、理解していけるかの視点が大事であることに気づいた。
- 自分の研究テーマはそもそも未来社会を描く必要性があった。ムーンショットに参加し、バックキャストで課題を検討した際、技術的問題のみならず、倫理、プライバシー、インフォームドコンセントの問題など、総合知に関わることを考えるようになった。
- COIには文理を問わず分野を越えて人が集まっているので、いろんな人と知り合えた。
- ムーンショットミレニアで「あるべき～」を課題とすると、人文社会の人を入れないといけなくなり、結果的に総合知になった。
- 技術が実社会に広がるに従って、人や社会への影響を扱う必要性・必然性を感じるようになった。

若手研究者へのヒアリング結果②

現状の評価法と総合知の親和性

- 他分野の研究者と交流することで、新たなアイデアが生まれ、それがまた成果にも結びつくといった好循環が生まれるため、異分野と交流しない方が不利であると認識。
- 異分野との連携は、研究の取組み範囲を広げることができるため、論文が出にくくなるといったデメリットは感じていない。
- ムーンショットミレニアの時は半年間、論文にならない時間をすごした。何もカウントされていない。楽しいのがモチベーションになり、その時間は役に立った。
- 異分野コミュニケーションには時間を要す。短期志向で研究が評価されるなら、それらの取組みをしない方がよいという考えも出てきてしまう。

問題なし



問題あり

人事に関する意見

- 人文・社会科学領域の専門家が、工学部教員と強力な連携を行っていても、講義負担の関係から工学部の教員になることは難しい現状がある。
- 異分野融合・連携、コミュニケーションが過度に取り上げられると、コミュニケーションは得意でないが専門性は優れているような人材を活かせなくなるリスクがある。
- 教員の採用にあたって、総合知やELSIの専門家を積極的に採用していないと感じる。人事権のある人で、境界領域や流動性のある研究が大事と言える人が増えなければ。

現状の評価の問題点

- 上の世代の先生や審査員の方は専門知を重視する傾向が強い。日本では社会実装に結びついていないアカデミックに閉じた研究が未だにもてはやされている節があるが、そこには違和感がある。
- 研究費応募の観点では、上の世代が重要と考える課題が対象となる。上の世代のみで構成されることが多い評価委員会の評価次第（価値観の違う人が評価すると評価が変わる）で予算打ち切りにもなるため、研究継続、20代の若手の雇用確保の面で常に心配がつきまとう。
- ELSIのような要素について研究者側はどのように報告し、審査側はそれをどのように評価すべきかが分からない。
- 社会実装、共創は今や当たり前。日本は、欧米に比べると、その評価の仕方は、圧倒的に遅れている。
- 大学からは、地域との関わりも評価されるようになっているが、論文数や産学連携の獲得研究費の方が高く評価される状況に変わりはない。

- Top10論文を求められる。
- 常に評価委員会からの評価を上げるためにうかがってやっている。本当は社会、市民からの評価が必要。
- 評価指標が出ればそれを満たすためだけの作業をしようとする人もいる。シンポジウムなどは、数値として示しやすい成果だから開催しようとする人もいる。
- **研究資金配分機関とのやり取りが煩雑。**

評価手法の改善方策について

- ビジョンを形成できた段階で一定の成果にならないか。論文数と横並びで定量評価することは難しいものの、非常に意味がある。
- 技術目標値以外のELSIのような要素も、長期的な視点で、評価してほしい。
- 産業界での総合知の活用が進み、ELSIが普及し、その専門家が必要とされるようになり、次のキャリアにつながるといった好循環ができればよいと思う。
- 多様なコミュニティーとのつながりが重要なため、有機的な繋がりを考慮・評価できる仕組みが必要。
- 多様な価値観に合うように、プロジェクト、テーマを増やして研究の多様性を確保して欲しい。
- 大学からの評価では、地域・社会への貢献、教育への貢献などの評価軸が導入されており、総合知に関わる要素も入ってきている。
- 研究者の時間の創出のため、評価や提案に関わる事務処理の減少、**研究資金配分機関**のDX化が望まれる。

ビジョンやプロジェクト提案に関する意見

- 「提案時にELSI的なことを言わないといけないから、人文社会科学者を取りあえず巻き込む」となってしまうと、もはや双方に自発的なモチベーションが無いので、創発的な研究ではなく、建前を整えるための「作業」になる。本質的には何も生まれず、お互い幸せにならない。
- 普段の生活に関わるものがやりやすいのでは。気候、環境など。Well-beingを評価するのは難しい。不幸をなくすことは指標にしやすいが、幸福は難しい。
- やるべきこと、重要なことは何なのかを立ち止まって考える時間がない次の予算獲得をいつも考えないといけない。悪循環に陥る。持続的な研究環境にない。
- 教授やシニアを集めたビジョンづくりの会議はシラケている。今のシステムを構築してきた人たちだから、全然変える気がない。
- 今の大学の仕事の流れ（テニュアになるために論文を書く）を疑問に思っている人たちは多い。目的（やりたいこと・研究すべきこと）と手段（お金）が逆にならないように、全員が考えるのが大事。